

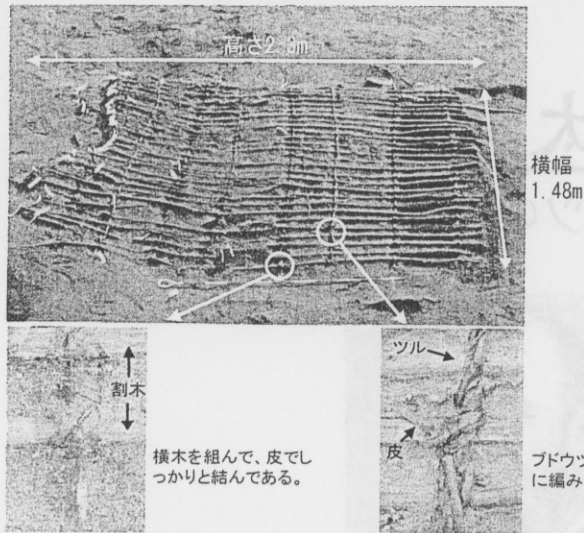
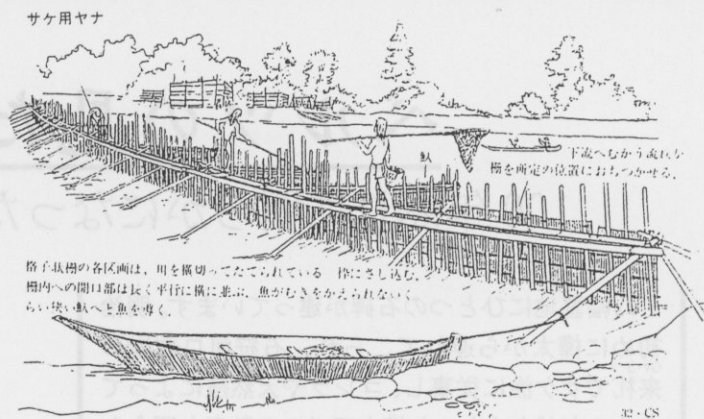
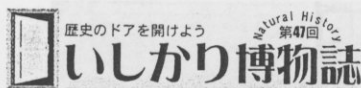


図3 石狩紅葉山49号遺跡の柵の一部



サケ用ヤナ 川の古い写真から作成、11・CS

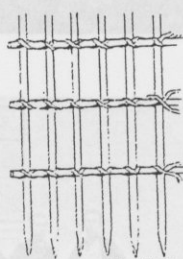
図1 サケ築の全体



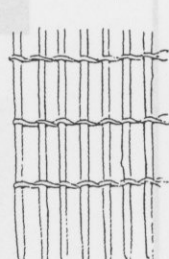
■文化財・博物館開設準備室
☎0133-72-6123
bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp

図1、2「海と川のインディアン—自然とわざとくらし」（雄山閣出版株式会社）より

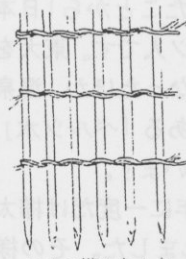
ヤナ用格子状柵 3例



シダーの割り枝の棒を細い枝でしばる、32・CS

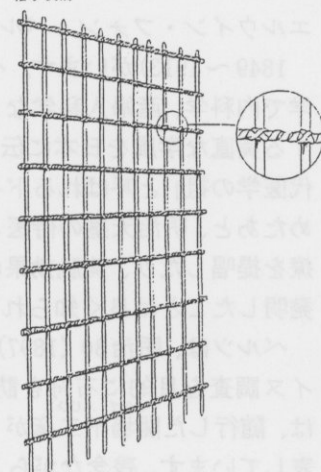


カエデあるいはムロ・アの縦材、42・CS



ひとつ燃りとふたつ燃りのシダーの細枝、81・CS

格子状柵



柵製作時の柵の例、川底に埋めるので先端は尖っている、1.40m、11・CS

図2 サケ築に使われた柵状のフェンス

カナダ先住民のサケ・マス漁

石狩弁天社のお祭りも終わり、石狩川にサケの上る季節となりました。先住民アイヌのいい伝えでは夜空の天の川は、石狩川が空に写ったものだといわれ、その年、サケが豊漁かどうかは天の川を見るとわかると言います。

石狩紅葉山49号遺跡の発掘で、4千年前、本格的なサケ・マス漁が始まっていたことが明らかにされました。そして使われた仕掛けは、柵状のフェンスを支柱にセツトするか、仕掛けに開口部を設け釜などを置くエリや築と呼ばれる仕掛けでした。もっとも注目されるのは、この仕掛けが、明治初期までアイヌ民族が行っていたサケ・マス漁の仕掛けとほとんど同じという事です。これは過去の調査例からみて偶然の一致ではなく、縄文の技術が各時代を経て明治期まで受け継がれた結果だと考えられます。

ところでシロザケをはじめサケ・マスは冷水の魚と言われ、日本海の北部、オホーツク海、ベーリング海、北太平洋など北の海を回遊し、母川に戻って産卵します。そしてこの沿岸の諸民族の多くは、サケ・マスを主食として生活し、さまざまな文化を生み出しました。

その典型的な民族は、石狩市の姉妹都市キャンベルバーにある北米北西海岸の先住民です。ここでは、サケ・マスとナッツ類で豊かな生活とトーテムポールなどに代表される文化を生み出しています。この地域でのサケ・マス漁は、河口に石囲いのエリを作るなど、多彩な漁法だったことは知られています。その中の一つにサケ築漁というものがあります。これはキャンベルバーのあるバンクーバー島のカウチヤン川というところで行われていたものです。図1がそのサケ築の全体で、かなり大規模なものです。そして図2は築に使われた柵状フェンスで、高さ1・4メートルほどあります。これにはシダーという杉の仲間の木が使われ、木と木を留めるのに桜の樹皮が使われています。このサケ築が使われていた時代は19世紀ころと伝えられ、現在はずでにないようですが、柵状フェンスの作り方は石狩紅葉山49号遺跡のものと瓜ふたつです。この地方でのサケ・マス漁は、4、5千年前にさかのぼるといふ説もありますから、代々受け継がれてきたとすれば、その起源が49号遺跡と同じぐらい古い可能性もあります。

（石橋孝夫）

（石橋孝夫）